個に応じた指導の在り方について

～ 歌唱指導の学習法を探って ～

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 …… 23
Ⅱ　研究の仮設 …… 23
Ⅲ　研究の全体構想 …… 25
Ⅳ　研究の内容 …… 27
　1　「個性」の意味 …… 27
　　(1)　「個性」とは何か …… 27
　　(2)　「個性の見方」 …… 27
　　(3)　個性の理解 …… 28
　　(4)　個性理解の着眼点 …… 28
　　(5)　個性理解をするうえで誤りやすい点 …… 29
　　(6)　科学的な評価法 …… 29
　2　「個を生かす」とは …… 30
　　(1)　なぜ「個を生かす」ことが大切か …… 30
　　(2)　「個を生かす教育」の視点 …… 30
　　(3)　「個に応じた指導」と個別化・個性化 …… 32
　　(4)　「個に応じた指導」と基礎・基本 …… 33
　　(5)　「個に応じた」授業形態 …… 33
　　(6)　「個に応じた」学習指導形態 …… 34
　　(7)　「個に応じた指導」の教育メディア …… 34
　3　「個に応じた指導」における関連図 …… 34
　4　音楽科における「個に応じた指導」 …… 34
　　(1)　「個に応じた指導」の充実 …… 34
　　(2)　音楽科における、表現活動の学習活動への配慮 …… 34
　　(3)　音楽科における評価の工夫 …… 35
　　(4)　「個に応じた指導」で表現活動をすると …… 35
Ⅴ　授業実践 …… 36
Ⅵ　研究の成果と今後の課題 …… 43
《参考文献》 …… 43

宜野湾市立宜野湾小学校
田　場　君　子

＜音楽科＞

個に応じた指導の在り方について

～ 歌唱指導の学習法を探って ～

宜野湾市立宜野湾小学校　教諭　田　場　君　子

I　テーマ設定の理由

学習指導要領が改訂されて，４ケ年目に入った。改訂の基本方針として，１　心豊かな，人間の育成，２　基礎・基本の重視と，個性を生かす教育の充実，３　自己教育力の育成，４　文化の伝統の尊重・国際理解の推進と，４つを掲げている。

総則では，「学校の教育活動を進めるに当たっては，自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を図るとともに，基礎的・基本的な内容の指導を徹底し個性をいかす教育の充実に努めなくてはならない」と，記されている。この方針は，これまでの学校教育の画一性・閉鎖性を打破し，これからの教育のあり方とともに，生涯学習へつながる自己教育力，個に応じる指導，学習の個性化を示している。

これは，これまでの知識の伝達に偏っていた教育の在り方を見直し，単なる知識の量だけでなく，近年における科学技術の発達，経済の発展，情報化・国際化等の急激な変化に対応できる子の育成をめざしている。

しかし，振り返ってみると，わたし自身も画一的な教師主導の授業が多かったように思える。子どもたちをみると，小学校低学年では歌を歌い・身体表現を楽しみ，楽器に触れることを喜んで活動するのに対して，高学年は，歌を歌うこと・楽器に触れることをさけてくる。又，やがて青年期になると歌謡曲を好み，バンドグループを編成し音楽に親しんでいる。この様子から，子どもたちは音楽を嫌いではない。では，なぜ一時期において避けるのかを考えた時，これまでの画一的な指導の見直しが問われてくる。

残念ながら私自身の勉強不足が，「個性とは」「個に応じた指導」と，いうことに対してまだ内容をしっかり握んでいないため，立ち止まっているのが現状である。

そこで，新しい学力観による音楽科の指導を目指して，個に応じた指導のあり方や，活動の多様化の研究を通して，音楽を子どもたちのより身近なものにしていきたい。又，子どもたちが，生涯にわたって音楽と関わりながら親しみ，心豊かに，社会の変化に対応する心の糧になることができればと願い，このテーマを設定した。

II　研究の仮説

1　歌唱指導において，子ども一人一人が自ら活動の課題を持ち，活動をするなかでふりかえりを促し，成就感を味わわせれば，自ら学ぶ意欲を高めることができるであろう。

2　児童の学習過程において，子ども一人一人が楽しみ，喜ぶ活動をするための教材の工夫をすることにより，豊かな心を培うことができるであろう。

III　研究の全体構想図

本校の教育目標

ひとりひとりの能力を開発し，豊かな人間性をつちかい，健康で明るくたくましい子どもの育成をめざす。

①じょうぶな子……健康で強い意志と実践力のある人間を育てる
②よく考える子……深く考え，主体的で創造力のある人間を育てる。
③思いやりのある子……礼儀正しく，情操豊かな人間を育てる。
④すすんで働く子…みんなのために進んで働く人間を育てる。

新教育課程基本方針

①心豊かな人間の育成
②基礎・基本の重視と個性教育の推進
③自己教育力の育成
④文化と伝統の尊重と国際理解の推進

県・(市)の教育目標

・自ら学ぶ意欲を育て，学力の向上を目指すとともに，豊かな表現力とねばり強さをもつ(幼児)児童生徒の育成を図る。
・平和で活力ある社会の形成者として，国際性を培い，郷土文化の継承・発展に寄与する心身ともに健全な県(市)民の育成を図る。
・家庭・学校・地域社会の相互連帯のもとに，時代の変化に対応し得る教育の方法を追求し，生涯学習社会への移行を図る。

中頭教育の指針

・確かな学力とあたたか味のある幼児・児童・生徒の育成

本校児童の実態

・明るく，元気な子。
・与えられた課題は真面目にやる。
・物事への反応がおそい。
・自分から進んで仕事を見つけ働こうとしない。

音楽科の目標

・表現及び鑑賞の活動を通して，音楽性の基礎を培うとともに，音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育て，豊かな情操を養う。

第3学年の目標

・音楽の美しさを感じ取り音楽活動をしようとする意欲を育てる。
・旋律の聴取と表現に重点を置いて，表現及び鑑賞の能力を育てる。
・音楽経験を生かして，生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる。

学年目標

・よく考えて学習する子（学習面）
・だれとでも仲良くする子
・喜んで働く子（生活面）
・明るくたくましい子（健康面）

学級目標

・明るく，元気な子
・さいごまで，がんばる子
・人の話をよく聞く子

音楽でめざす子ども像

・音楽との触れ合いが好きな子ども。
・音楽から学ぶ楽しさがわかる子ども。
・音楽を通して心豊かにできる子ども。

研究主題

個に応じた指導の在り方について
―― 歌唱指導の学習法を探って ――

研究仮説

・歌唱指導において，子ども一人一人が自らの活動の課題を持ち，活動をするなかでふりかえりを促し，成就感を味わわせれば，自ら学ぶ意欲を高めることができるであろう。
・児童の学習過程において，子ども一人一人が楽しみ，喜ぶ活動をするための教材の工夫をすることにより，豊かな心を培うことができるであろう。

研究目標と方法

・個に応じた指導法を知り，新しい学力観に立った指導改善を図る。
・研究の方法は，理論研究と，研究の仮説を実践事例で検証し研究のまとめとする。

研究内容

「個に応じるとは」の理論研究

・「個に応じる指導」の理解
・「個性」とは
・「個性」の見方・理解
・「個を生かす」とは
・「個を生かす」の視点
・「個に応じた」個性化・個別化
・「個に応じた」基礎・基本

個に応じた指導法の理解と確認

実践事例の収集と検証

・音楽科目標
・教材選択
・教材研究
・検証授業
・評価

研究仮説の検証

評　価

Ⅳ　研究内容

1　「個性」の意味　　—心理学的考察から—〈上越教育大学学長　　辰野千尋〉

(1)　「個性」とは何か

- 個性とは，身体的・精神的な面（体つき，顔つき，考え方，感じ方）において，他の人がまねることのできない，その人特有の全体的特徴である。
- 個性は「かけがえのない個ゆえに備わっているもの」である。
- かけがえのない「よさ」や「可能性」は子どもの「個性」である。

(2)　「個性の見方」

①　現実の個性と理想の個性

個性
- 現在持っている個性（自然としての個性）
- 将来伸ばしてやりたい個性（理想とする個性）

- 望ましいもの・価値のあるもの
- 望ましくないもの・価値のないもの

※　子どもが持っている現在の個性から，理想の個性，望ましい個性をめざして個性の伸長をはかることが大切である。

②　生得的個性と獲得的個性

- 生得的個性……体つき，顔つき，知能等の生まれつき持っている面。
- 獲得的個性……経験や教育，本人の努力によって伸ばした面。

※　個性は伸ばすこと，育てることもできる。そこで，「この子は，この程度の能力だから，やってもダメだ。」と，決めつけるのは誤りである。

③　顕在的個性と潜在的個性

- 顕在的個性……表に現れている，現実の個性　　［目立つ個性］
- 潜在的個性……表に現れない，可能性としての個性　　［目立たない個性］

※　目立たない部分にも気を配り，望ましい方向に育てること，隠れた能力や適性を見つけることが大切である。

④　個性と社会性

- 人間は，独自性を持ちながら，同時に社会の中で生活をしている。
- 個人の独自性も社会の中で形成されていく。
- 個性の伸長では，他の個性を尊重し，他の人格を認め，社会に適応できる個性を伸ばすことである。

※　義務教育においては，集団生活に必要な一定の規則を守り自己統制力を身につけることが大切である。
この基礎がなく，わがままだけでは真の個性を伸ばすことはできない。

⑤　個性と調和的発達

- 教育は，知・徳・体の調和的発達を目指している。

・個性を伸ばすということで，早くから，その子の優れたところや，得意とするもの，好きなことだけを強調するのは良くない。

・社会で使用している共通の言葉や生活様式，生活規範を獲得し，社会の価値に従って生活することを学習しなければならない。

※　義務教育では，国民として必要な知識・技能・態度を身につけさせることを目ざしている。そこで，個性尊重ということで，あまり偏った教育をするのはよくない。基礎をしっかり身につけさせなければ，子どもの特徴も生かされない

(3)　個性の理解

①　個人間差異（個人差）

・他の人と比べ，その人の特徴がどこにあるかをみる。

・個性の背景には個人差があり，個人差を理解することは個性を理解する有力な手がかりとなる。

②　個人内差異

・その個人の中で，どの特性が優れ，どの特性が劣るかを知る。

※　個人間差異と個人内差異の両方を知ることによって，その人の特徴を全体的にとらえることができる。

(4)　個性理解の着眼点

①　知能

・可能性としての能力で，生活場面において比較的新しい問題や境遇に対して思考を働かせ，うまく適応する能力である。

②　才能

・音楽的才能・文学的才能という特殊能力をさす場合に用い，知能はこのような才能の根源にある。

③　創造性

・新しいものを初めて作り出す能力で，問題に対して敏感で，考えが独創的で（独創性），流暢に（流暢性），そして柔軟に（柔軟性）考えるのが特徴である

④　学力

・一定の学力によって獲得された認知的，情意的，技能的能力（知識，理解，思考，技能，関心，態度等）である。

・知能は学習の可能性に対し，学力は学習の結果である。

⑤　気質・性格

・気質……情緒的反応で，刺激に対し情緒的反応が強いか，弱いか，早いか，遅いかなどの傾向を表し，生理的・身体的なものに依存している。
遺伝的色彩が強いとされている。

・性格……気質を中心にして環境の影響で後天的につくられたもの。

※　現実における個人の行動傾向は，どこまでが気質でどこまでが性格は，厳密に区別することはできない。

⑥ 興味・関心・態度

・興味……物に対するおもしろみ，好き，嫌いのような感情を伴うこと。

・関心……積極的・選択的に心を向けること。心にかけること。

・態度……個人があることにおいて、いかなる反応を決める一種の構え，傾向である。

⑦ 適性

・ある特定の仕事や，活動をうまく行うために必要な能力。

・潜在的能力。

⑧ 認知型・学習スタイル

・認知型……外界からの刺激を受けるとき，その見方，受けとめ方，処理の仕方における個人の好み。

・学習スタイル……学習場面における認知活動の好み。

※ 学習スタイルの一つとして認知型も含まれるが，認知活動における好みから見ると両者を厳密に区別することは難しい。

⑨ 体力・運動能力

・身体を動かす能力や抵抗力，運動のための能力（敏しょう性，器用さ，柔軟性、持続力等）

(5) 個性理解をするうえで誤りやすい点

① 潜在的個性

ア 能力・適性があっても，何かの原因で，個性が表に現れにくい。

イ 健康状態や性格，学習習慣によって，知能が十分に発揮されない。

ウ 機会がなく才能が現れない。（音楽・絵画等）

エ 能力の見方を間違えることもある。

（例，言葉による発表が苦手な子どもに，言語性の調査だけで判断するのはよくない。）

オ 好き・嫌いで能力・適性の判断を誤ることもある。

カ 一つの特性が優れていると，他の特性も優れているとの判断。

キ 厳格になり過ぎたり（厳格の誤り）甘くなりすぎたり（寛大の誤り）すること

ク 本人が自分の個性を誤って理解する時。

（例，うぬぼれの強い子は自分の能力を過大に評価するし，控えめな子は過小に評価する。）

(6) 科学的な評価法

① 観察法

・内観法（内省法）……自分の個性を理解するために性格や行動を観察するとき。

・他者観察法（観察法）……他の人が，性格や行動を観察するとき。

・観察法 ┌ 自然的観察法……自然に起こる行動や，変化の観察。
　　└ 実験的観察法（実験法）……計画的な条件のもとで人為的な行動や変化の観察。

※　観察による個性の理解には，一定の計画を立て，一定の見地から注意深く，精密にとらえることが大切。

②　テスト法

・標準検査から，個人や集団の検査をし，成績と標準成績と照らし合わせ，順位や優劣や個人の長所・短所を調べる方法。
（知能検査・標準学力検査・性格検査・興味検査）

③　品等法

・数量的に測定できないものに対し，価値判断を行う。
（例，評定尺度法）

④　質問法（面接法）

・行動や態度の観察だけでなく，直接本人の気持ちや考えを聞き出す。

※　本人の発達段階を考えて，気楽な雰囲気を作ることが大切。

⑤　質問紙法

・調べる事項を子どもに与え，各自に記入させる方法。

⑥　投影法

・日常生活で，抑圧されている欲求や不満の型や程度・性格の理解を，見つける方法。

※　ロールシャッハ・テスト，絵画統覚検査（ＴＡＴ）

⑦　事例史研究法（事例研究法）

・特殊な事例については，個人の生活史を詳細に調べ，問題の性格とその形成過程を明らかにする方法。

2　「個を生かす」とは

子どもの現状をあるがままの存在として受け止め，多様な可能性を引き出し伸ばすことにより，独自的なよりよい存在に高まる子どもの努力を支援すること。

(1)　なぜ「個を生かす」ことが大切か

①　「個性」を大切に伸ばすことが，「個」の人間形成の調和ある教育のなかに位置づいたものであること。

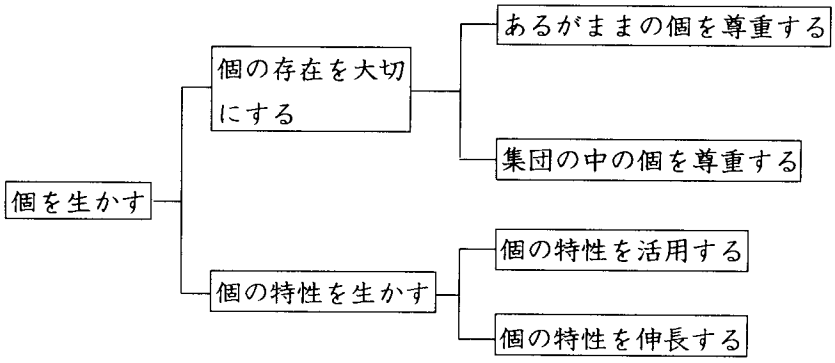
②　「個性」を重視する教育は，すべての「個」に具体化されていかなければならないものであること。

③　「個性」を大切にする教育の実践化は，「個」の可能性は，内からの発揮があってできるものであること。

(2)　「個を生かす教育」の視点

①　「個を生かす教育」の理念

・「個を生かす」ということは，「個の存在を大切にする」，「個の特性を生かす」ということの調和のうえに成り立っている。

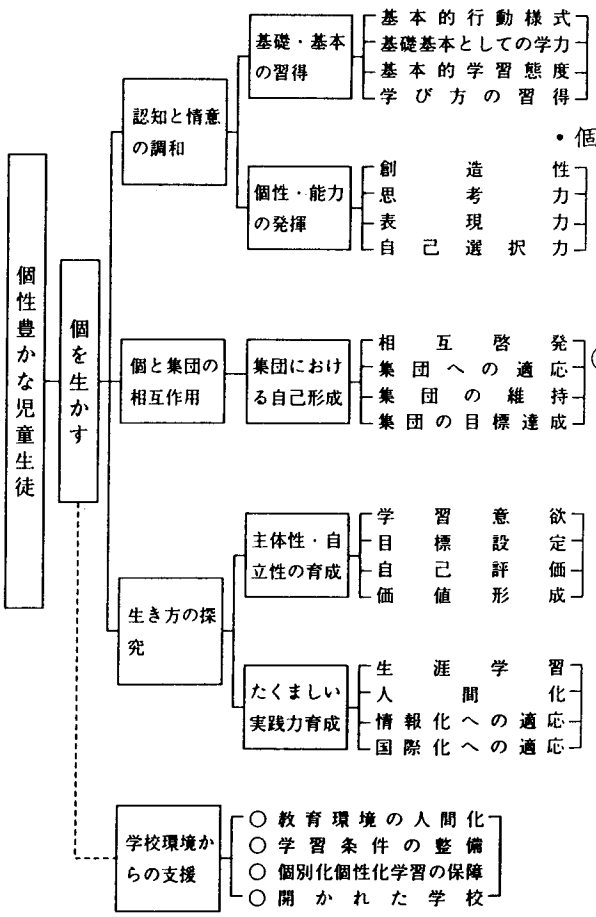


② 「個性豊かな子ども」とは

・下のア・イ・ウからなる３つの側面を持ちながら，個の独特の仕方で調和・統一していく。

「個性豊かな児童生徒」が身につける「資質・能力」

【実践化の視点】【実践の課題】【育成すべき資質・能力】



・個性豊かな子ども
- ア 認知と情意の調和で基礎・基本を習得し個性・能力をつけながら，
- イ 他を受容し，自己を表出する力を高め，
- ウ 主体的にたくましく生きていく。

③ 個性豊かな子どもの資質・能力（左図）

・個性豊かな子どもが身につける資質・能力がどのようなものであるかを検討し，20項目にまとめ，求める子ども像を，より具体的に示した。

④ 「個を生かす教育」の実践化の視点

次の４つの視点を焦点化した。

ア 認知と情意の調和

(ア) 学びに対する「自信」を持たせる（基礎・基本の習得，個性の深長）

・子どもの発想を大切にし，「やればできる」という成功感・成就感を持たせるために，学習意欲や学ぶ楽しさ，学び方を見つけることが大切である。

(イ) わかり方の違いを大切にする

・個の存在感を高める，生きて働く力の形成を図るうえからも，学習に生活経験を取り入れたり，場面や状況を具体的にしながら，子どもの思考の違いを大切にする。

(ウ) 心豊かでたくましい実践力

・認知と情意の調和を図ることは，教科指導だけでなく，教科外の指導でも充実する必要がある。基本的な道徳性のかん養は，個性を重視した教育における心の教育の在り方として重視する必要がある。

イ 個と集団の相互作用

・個を生かす教育は，個人的な側面を常に優先しようとするものではない，他者受容，自己表出を基盤にした子どもの社会性の育成を，積極的に教育の中で問題にし，個性・能力を発揮できる子どもを育成することが大切である。異文化との交流や国際理解教育とも関係してくる。

ウ 生き方の探求

・時代的な状況で個を取りまく環境は変化していく。そこで教養を修め，主体的でたくましい実践力のある人が創造性を発揮し，個性的で豊かな自分の生き方をし，また，人間としての在り方，生き方については，物質的に豊かになり価値観が多様化した自由な社会においては避けられない問題である。

エ 学校環境からの支援

・「個を生かす教育」を広い視野から総合的に考えて「学校環境からの支援」や「個が生きる場」という視点からみると非常に大切なものです。

また，多様な教育方法を試みたり，潜在的な教育力を，目に見える教育的な手だてとしていくための学校環境は，教育条件をつくりあげていく重要なポイントである。

(3) 「個に応じた指導」と個別化・個性化

個別化・個性化教育において，「指導の個別化」「学習の個性化」という2つの概念が用いられている。

① 指導の個別化

・言葉の頭に「指導」という言葉があるように，教師の側が指導目標を設定し，その指導目標を効率よく児童一人ひとりに達成させることをめざしている指導・学習活動の展開をすることである。

この場合，教師がイニシアチブをとった授業で学習課題も展開の道筋も，学習方法やメディアも教師から提供される。ただし，授業は児童の個人差を踏まえ時には，個人差を生かす指導がなされる学習形態は個別学習の場合もあり，一斉学習の中で小集団を組む場合もある。

② 学習の個性化

・言葉の頭に「学習」という言葉をつけておいたように，教師ではなく児童の側が学習目標をできる限り設定して，自分の個性を伸ばすことを促している指導，学習活動の展開を与えたものである。

児童の個性，もち味，あるいは「よさ」を伸ばしていこうとするものである。

③ 個別化教育からみた個人差

(ア) 進度差

学習者が，ある一定の教育内容を学習するために必要とする時間の差である。我が国では，学年制をとりながら進度別に構成されたグループ学習が多くみられる。

(イ) 到達度差

学習を進めるにあたり，個々の学習者がもつ到達の度合い，習熟の度合いには常に差がみられる。現実には到達度差，習熟度差に合わせていくつかのグループを作り，それに合った教材を準備して学習活動を行っている。

(ウ) 学習スタイル差

子どもたちの学習の進め方，学習の仕方はいろいろな形での個人差がみられるそれぞれの子どものもつ特性の差を学習スタイル差とよぶ。

(エ) 興味・関心差

子どもたちのもつ興味や関心によって学習の選択を認め，学習者の個性を伸ばしていこうとするもの。

(4) 「個に応じた指導」と基礎・基本

基礎・基本はすべての子どもたちが等しく身につけるべき学力であるのに対し，個性は一人一人の子どもが違った形で身につけるものです。教育によって実現すべき状態を個人差からとらえると，基礎・基本は個人差の解消をめざして教育指導が行われるべき目標であり，個性は個人差の拡大をめざして教育指導がなされるべき目標である。

基礎・基本を達成するためには，一人一人の個性を生かした指導がなされなければならないし，また，基礎・基本が身についてはじめて個性を伸ばすことができるのである。両者は密接な関係にあり，どちらか一方だけを強調しても真の「個」を生かすことはできない。

(5) 「個に応じた」授業形態

これまで，一斉指導が行われてきたが，今後は，個に応じ個を生かす授業を展開するために授業形態の工夫が求められている。

① 一斉指導

・一斉指導を補充する個別指導の在り方。

② 個別学習とその指導

・個別学習に時間を多く割り当てる授業の工夫。

・子ども自らの意欲を喚起するのに効果的な，学習課題の選択できる学習。

・自ら課題を設定する学習。

③　グループ学習とその指導

・グループモデルによる学力差を考慮した個別指導。

(6)　「個に応じた」学習指導形態

①　完全習得学習（マスタリー・ラーニング）

②　問題解決学習

③　ティーム・ティーチング

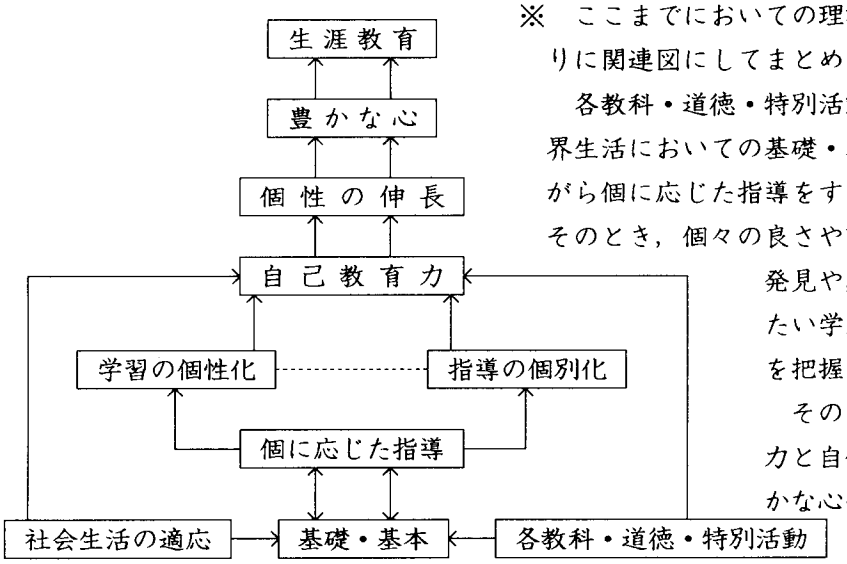
(7)　「個に応じた指導」の教育メディア

①　視聴覚教育機器

②　パソコンの活用

③　情報活用能力の育成

3　「個に応じた指導」における関連図



※　ここまでにおいての理論研究を自分なりに関連図にしてまとめてみた。

各教科・道徳・特別活動，そして，社界生活においての基礎・基本をおさえながら個に応じた指導をする。

そのとき，個々の良さや望ましい個性の発見や，さらに伸ばしたい学力，遅れた学力を把握し指導にあたる

そのことが，自分の力と自信につながり豊かな心の育成となり生きる力の糧となるであろう

4　音楽科における「個に応じた指導」

(1)　「個に応じた指導」の充実

①　音楽の学習では，単に正しく演奏できるようになることだけではなく，音や音楽の世界に遊び，音や音楽の美しさ，楽しさに触れる喜びを持たせること。

②　一人一人の喜びや感動をいつも学習の中心におくこと。

③　学習を進めるためには，学習に伴う様々な感情や心の動きを大切にし，指導を展開すること。

(2)　音楽科における，表現活動の学習活動への配慮

①　自分の思いやイメージを広げ生かすような学習指導の工夫。

②　自分のよさや可能性を自ら発揮し，主体的に楽しく活動を行うような学習指導の展開。

③ 新しい学力観に立つ学習指導をする。つまり，自ら音楽を聴いて感受したことを自ら考え判断し，工夫して表現していく学習の展開の工夫。

④ 自ら音楽をつくり出す活動の内容や場の設定。

これまで教師が行っていた音楽の解釈や，表現の工夫を子どもの側にゆだねること，そして，その解釈や表現の工夫を，教師はすべて評価してやることが大切である。

(3) 音楽科における評価の工夫

音楽の学習指導に役立つ評価の改善を図るとともに，評価の内容・方法も子どもの実態に即した明確なものとなるよう改善を図り，何を，いつ，どのように評価するのか十分に把握することが必要である。

① 指導前における評価

ア 音楽的に魅力ある曲を教材として選ぶ。

イ 子ども一人一人を生かす教材にする。

ウ 子どもの学習意識を軸にした指導計画を立てる。

エ 子ども一人一人がそれぞれの活動に生きるようにする。

※ 子どもの経験，し好等の調査（アンケート，事前調査等）

② 指導過程における評価

ア 子どもの活動の様子や表現の内容の把握。

イ 数値化しにくいものも大切に評価する。

ウ 評価の観点と評価基準をはっきりさせる。

エ 指導の軌道修正を図る。

オ 具体的な実践事例から評価を考える。

カ 子どものよさや変容を把握する。（記録カード，学習カード）

③ 指導後における評価

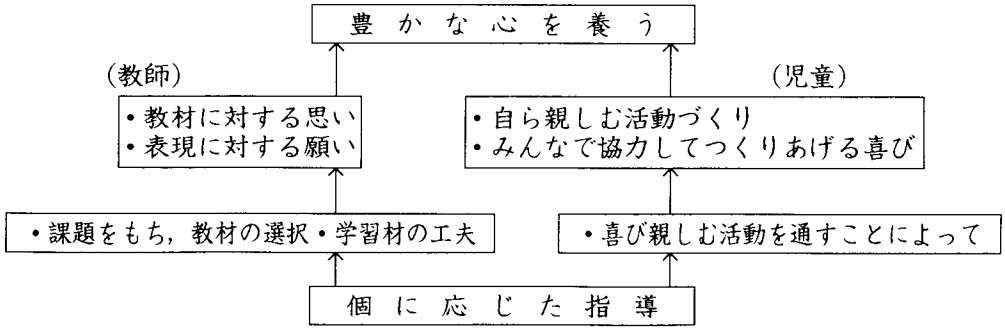
ア 子どもの変容をとらえよう。

（学習カード，記録カード，アンケートや感想文，演奏や録音，ビデオ録画）

イ 評価資料は整理して蓄積する。

ウ 題材ごとに評価資料をまとめ蓄積する。

(4) 「個に応じた指導」で表現活動をすると



V　授業実践

音楽科学習指導案

平成８年１月22日（月）３校時
宜野湾小学校３年２組　男子20名，女子19名
授業者　　田　場　君　子

1　題材　「イメージをつかんで表現しよう。」

2　題材設定の理由

今回の教育課程の改訂で音楽教育は，これからの社会の急激な変化に伴う，児童の生活や意識の変容に配慮するとともに，生涯教育の基盤に立ち，新しい教育の在り方や学習指導の質的な改善を図っていかなければならないと述べている。

そして，「心豊かな人間の育成」「個性を生かす教育」「自己教育力の育成」を掲げ新しい学力観にせまっている。

その中の，「個性を生かす教育」においては，児童一人一人が心身ともに健康で豊かな心をもち，たくましく生きて行くための基礎的・基本的な内容を着実に身に付けることを，ねらいとしている。

そこで，児童一人一人の実態をよく把握し，「個に応じた指導」を充実すことにより子どもたちが自分なりの感じ方や考え方を生かし，よりよい音楽を求め自ら工夫し表現しようとする意欲が育つであろう。そのためには，一人一人が自ら課題にはたらきかけ成就感や満足感を得て，新たな活動意欲を持たせる学習指導の展開が求められる。

本学級の子ども達は歌を歌ったり，笛を吹くことを好み，音楽の時間が大好きであるまた，音楽の時間だけでなく，朝の会や帰りの会でも積極的に歌っている。しかし，一斉学習で喜ぶ子ども達も，一人一人の工夫で歌や演奏の表現をしたりする創造的な音楽活動をするには至っていない。そこで，子ども達が自ら工夫して音楽活動をするための自分なりの考え方や，とらえ方，表現のできる場を授業の中に取り入れなくてはいけないと考え，本題材を具体的にとらえさせるために，「イメージをつかんで表現しよう」という題材を設定した。

3　指導目標

(1)　音楽への関心・意欲・態度
- グループ学習で自分の担当を大切にしながら，友達と協力し楽しく表現活動をすることができる。

(2)　音楽的な感受や表現の工夫
- 歌詞や曲からイメージを持ち，そのインージをふくらませながら表現を工夫することができる。

(3)　表現の技能
- 曲の感じを生かした音づくりや，表情豊かに歌うことができる。

(4)　鑑賞の能力
- それぞれの表現の工夫やよさを感じ取って，聴くことができる。

4　目標系列と指導内容

教科の目標	表現及び鑑賞の活動を通して，音楽性の基礎を培うとともに，音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育て，豊かな情操を養う。
学年の目標	(1)　音楽の美しさを味わい，音楽活動をしようとする意欲をそだてる。 (2)　旋律の聴取と表現に重点をおいて，表現及び鑑賞の能力をそだてる。 (3)　音楽経験を生かして，生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる。
本題材の目標	(1)　グループ学習に参加し，友達と協力して演奏することができる。 (2)　曲の特徴からイメージを持ち，そのイメージをふくらませ，表現することができる。 (3)　曲の感じを生かし，表情豊かに表現することができる。 (4)　それぞれのグループの演奏を聴きあい，自分の演奏に生かすことができる。
本時の目標	・自分のやりたい表現を選択し，グループで協力してイメージを出し合い表現活動をすることができる。

指導内容	低学年	中学年	高学年
A 表現	(2)楽曲の気分や音楽を特徴付けている要素を感じ取って工夫して表現できるようにする。 ア歌詞の表す情景や気持ちを想像して表現すること。 イ拍の流れやフレーズを感じ取って，演奏したり身体表現をすること。→	(2)曲想や音楽を特徴付けている要素を感じ取って，工夫して表現できるようにする。 ア歌詞の内容を理解して表現の仕方を工夫すること。	ア歌詞の内容及び楽曲の仕組みを理解して，それらを生かした表現の仕方を工夫すること イ拍の流れやフレーズを感じ取って，強弱や速度の変化に応じた演奏をしたり，身体表現をすること。
	(3)歌い方や楽器の奏法を身に付けるようにする。→		
	ア自分の歌声及び発音に気を付けて歌うこと。 イリコーダー及び打楽器を演奏すること。	ア発音及び呼吸の仕方に気を付けて，頭声的発声で歌うこと。 イ音色に気を付けてリコーダー，鍵盤楽器及び打楽器を演奏すること。	ア発声及び呼吸の仕方に気を付けて，豊かな響きの頭声的発声で歌うこと。 イ音色の特徴を生かして，旋律楽器及び打楽器を演奏すること。
	(4)音楽をつくって表現できるようにする。→		
	ア簡単なリズムや旋律をつくって表現すること。 イ即興的に音を探して表現すること。	ア旋律や音の組み合わせを工夫して表現すること。 イ即興的に音を選んで表現すること。	ア音の重なりや曲の構成を工夫して表現すること。 イ自由な発想で表現すること。
B 鑑賞	(1)音楽を聴いて感じ取ることができるようにする。→		
	ア楽曲の気分を感じ取って聴くこと。 イリズム，旋律及び速さに気を付けて聴くこと。	ア曲想の変化を感じ取って聴くこと。 イ音楽を特徴付けている要素に気を付けて聴くこと	ア曲想を全体的に味わって聴くこと。 イ音楽を特徴付けている要素と曲想とのかかわりに気を付けて聴くこと。

5　教　材

A	「おばけなんてないさ」	槇　みのり	作詞	峯　陽	作曲
B	「おかしのすきな　まほう使い」	秋葉てる代	作詞	大熊崇子	作曲
C	歌げき「けいきへい」じょ曲	ス　ッ　ペ	作曲		

6　教材選択の観点

A　「おばけなんてないさ」

今日の子ども達の「おばけ」に対する心境をユーモアたっぷりに描いた歌詞で，おばけから次々と想像を広げた場面の描写が物語風に構成され，子ども達の関心をひく歌詞内容やおもしろさから，歌い方を表情豊かに，いろいろ工夫させることが，表現の幅を広げることができる。

B　「おかしのすきな　まほう使い」

魔法を使える少々あわてんぼうな女の子の様子をユーモラスに描いた歌詞で，場面設定のナレーションや魔法使いのせりふなども入っている。

この歌詞は物語風にまとめられており，各場面の様子が子ども達も親しむことができるであろう。また，子ども達のイメージを歌い方の工夫の活動として生かすと，そのイメージ作りをきっかけに，ナレーション，せりふ，身体表現，歌，つくった音などを構成すると劇化に発展することもできる。

さらに，グループ学習で活用すると，子ども達に教材を中心とした幅広い表現経験を持たせることができよう。

C　歌劇「けいきへい」じょ曲

ふしの変化，感じの違い，速度の変化，がはっきりしていて，音楽の移り変わる様子が感じ取りやすい。各段落ごとの曲想を感じとって，自由に場面を想像させたりしながら聴かせたい。

7　評価の規準

	評価の観点	評　価　の　規　準	教材
観点①	音楽への関心 意欲・態度	・自分がやりたいことを選択し，意欲的に参加しようとする。 ・友達と協力し，楽しく表現活動をしようとする。	A B
観点②	音楽的な感受 や表現の工夫	・歌詞や曲からイメージを持ち，登場人物やその場面を描きながら，表現の工夫に努めることができる。	A B
観点③	表現の技能	・イメージをもとに，歌や楽器の音色を工夫し，演奏することができる。 ・自分の持ち場を，のびのびと身体表現をすることができる。	A B
観点④	鑑賞の能力	・それぞれの表現の工夫やよさを感じ取り，聴くことができる。 ・場面を想像しながら，興味深く聴くことができる。	B C

8　児童の実態

男女の仲が良く，明るく元気のあるクラスで，音楽を好きな子が多い。喜んで歌を歌ったり，笛を熱心に吹いたりするが，張り切りすぎて声を張り上げたり，笛での指使いや，音の出し方が粗野できれいな音をつくりだすには至っていない。

また，楽曲の内容の「自分の気持ちを表現する」ことは，不慣れのせいか周りを気にしたり，照れたり，恥ずかしがったりして十分にできない。

グループ活動は，生活グループを中心とし，社会科の地図作り，理科の観察，話し合い学習は経験している。しかし，音楽でのグループ活動はほとんどやっていない。

そこで，グループ活動を通して表現を工夫する過程から，グループで協力し，創りあげる楽しさや喜びを味わわせたい。

9　指導計画

教　材	次	ね　ら　い	時	主　な　学　習　活　動	評価の観点
おばけなんてないさ おかしのすきなまほうつかい	1	歌詞やリズムのおもしろさを感じとって歌わせる。	1	・旋律を覚えて歌詞唱し，歌詞やリズムのおもしろさを感じ取る。	観点① 〃　②
			2	・自分の持つ「おばけ」のイメージにあう歌い方を工夫して歌う。 ・歌詞の内容に合う動作を工夫する。	観点③ 〃　②
	2	場面を想像し朗読や楽器を加えたりして表現する能力をそだてる。	3	・旋律を覚えて歌詞唱するなかで，歌詞のおもしろさ，声の出し方に興味を持ち歌う工夫をする。 ・朗読に関心を持ち，朗読のしかたを工夫する。	観点① 〃　②
			4 (本時)	・自分のやりたい表現を選択する。 ・グループを編成し，協力して表現方法を工夫する。	観点② 〃　③
			5 6	・各グループで練習をする。 （歌の工夫・朗読の工夫・楽器の工夫・ふしづくり） ・イメージに合った音や，楽器選びをする。	観点② 〃　③
			7	・グループごとに練習したことを発表し，互いに感想や意見を出し合う。 ・気持ちをこめて，発表をする。	観点③ 〃　④
序曲 歌劇 いけき	3	情景を想像しながら聴き，曲の構成や楽器の音色を感じとらせる。	8	・情景を想像しながら聴き，曲の特徴や楽器の音色をかんじとる。 ・鑑賞後，簡単な感想をかく，	観点④ 〃　①

10　本時の指導

(1)　本時の指導目標

自分のやりたい表現を選択し，グループで協力してイメージを出し合い表現活動をすることができる。

(2)　授業仮説

①　グループ活動において，自分のイメージにあう音を探したり選んだりする活動を取り入れれば，主体的な表現活動ができるであろう。

②　グループ活動において，友達の表現の良さを認めたり，話し合ったりすることをさせることによって，協力的に音楽をつくりあげることができるであろう。

(3)　本時の展開

	学　習　活　動	指　導　上　の　留　意　点	評価・方法
導入⇩とらえる⇩	1　前時までの学習を想起して歌う。 2　「おかしのすきなまほう使い」を斉唱する 3　めあてを確認する。 楽しい演奏の方法をみつけよう。	・楽しい雰囲気で歌わせる。 ・身体で拍子をとらせて歌わせる。 ・情景を想像しながらうたわせる。	・楽しく，進んで歌っているか。（観点①）
	4　表現したいグループにわかれる。	・今日の課題をしっかり確認させる。 ・前時で予告した，自分のやりたい表現のグループに分かれさせる。 ☆歌のグループ　☆踊りのグループ ☆せりふのグループ　☆楽器のグループ	・進んでグループに分かれているか。
見通す⇩	5　グループで表現の方法を話し合う。	・イメージを持ち，どこを，どのように表現するかを話し合いきめさせる	・イメージにあう音を選んだり，探しているか。
	6　グループみんなで協力し練習する。	・グループごとに活動状況を確認し，指導支援をする。 ☆歌い方　☆声の調子 ☆楽器の使い方　☆振り付け	・イメージをとらえて工夫して表現しているか。（観②③）
確める⇩	7　各グループの練習の成果を発表する。	・グループのめあてを知らせ，練習の成果を聴いている人に伝わるように，発表する。	［グループ指導により個々のチエック］
	8　感想や意見を発表する	・よい点を認め，互いにアドバイスができるようにする。 ・学習カードに感想や意見をまとめ，自分の演奏もふりかえさせる。	・自己やグループのよさや課題を見つけることができたか。
まとめ	9　次時の学習を確認する	・お互いの評価をもとに次時への意欲を高める。	（観④　ふりかえり学習カード）

11　評価基準表

題材　「インージをつかんで表現しよう」

教材A「おばけなんてないさ」B「おかしのすきなまほう使い」C歌劇「軽騎兵」序曲

	題材のねらいと観点別評価目標	時	教　材	具体的評価項目	十分できる(A)	概ねできる(B)	努力を要する(C)
評価基準	［題材のねらい］ (1) グループ学習で，自分のイメージを大切にしながら，友達と協力して表現活動をすることがとができる。 (2) 曲の特徴や歌詞からイメージを持ち，そのイメージをふくらませ工夫し，表現することがでができる。 (3) 歌詞や曲の感じを生かし表情豊かに身体表現をすることができる。 (4) それぞれのグループの演奏を聴きあい，自分の演奏に生かすことができる。 ［題材の観点別評価目標］ ① 音楽への関心・意欲・態度 ・自分がやりたいことを選択し意欲的に参加することができる。 ・友達と協力し，楽しく表現活動をすることができる。 ② 音楽的な感受や表現の工夫 ・歌詞や曲からイメージを持ち場面を描きながら表現の工夫に努めることができる。 ③ 表現の技能 ・イメージをもとに，歌や楽器の音色を工夫し表現することができる。 ・自分のイメージを，のびのび身体表現をすることができる ④ 鑑賞の能力 ・それぞれの表現の工夫やよさを感じ取り聴くことができる ・場面を想像しながら興味深く聴くことができる。	1	A	・曲の感じをつかんで歌ったり身体を動かすことができる。 (観②)	・曲の感じをつかみ，歌ったり身体表現をしている。	・曲の感じを大体つかみ，歌を歌っている。	・曲の感じをつかむにいたらない。
		2	A B	・歌詞の内容を理解し，イメージを持って歌ったり，リズムにのって表現ができる。(観②③)	・場面や情景にあった歌の歌い方を工夫している。	・場面や情景にあった歌を歌っている。	・場面や情景にあった歌が歌えない。
		3	B	・旋律を覚え，歌詞唱や朗読に関心を持ち，歌う工夫ができる。 (観②)	・旋律を覚え歌詞や朗読に興味を持ち歌い方を工夫している。	・旋律を覚え歌詞や朗読をしている。	・自ら進んで歌おうとしない。
		4	B	・グループの話し合いに参加し，意見やイメージを出し，表現方法を見つけようとする。(観②③)	・グループの話し合いに積極的に参加し表現の方法をいろいろ工夫している。	・表現の方法について，グループの話し合いに参加しようとしている。	・話し合いには参加しているが表現方法を考えようとしない。
		5 6	B	・それぞれのグループで工夫しながら練習することができる。 (観②③)	・グループのみんなと協力し表現の工夫をしながら練習している。	・グループのみんなと表現の練習をしている。	・グループのみんなと表現の工夫ができない。
		7	B	・自己やグループの良さや課題を見つけることができる。 (観③④)	・曲想を生かした表現ができグループや自分の課題を見つけている。	・曲の感じにあった表現ができ自分の課題を見つけている。	・曲にあった表現ができない。
		8	C	・それぞれの場面の特徴を表している楽器の名前がわかる。 ・情景や場面を想像して聴き感想がいえる。 (観④)	・楽器の音色に興味を示し聴いた感じを発表している。	・楽器の音色に興味を示し音楽を聴いている。	・楽器の音色に興味がなく音楽を聴いていない。

12 授業を終えて

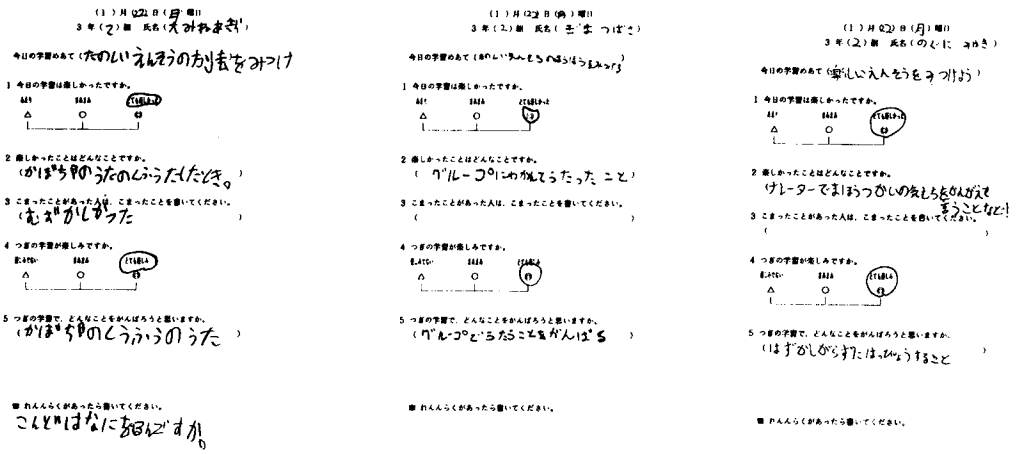
① 子ども自ら，イメージを持ち活動を選択すると，どの子も生き生きと表情豊かに学習に参加することができた。しかし，恥ずかしがったり，周りの友達を気にする子が少々見られる。

もう少し時間をかけ，継続的に学習活動を進めれば自分に自信をつけ，主体的な活動ができると考える。

② 同じイメージを持つ子どもたちが，グループ活動をすることで，みんなで工夫し表現を高めようとする態度を見ることができた。しかし，活動時間が短く子ども達の活動を練り上げるまでにはいかなかった。また，その後の発表も活発さにかけた。

③ ふりかえり学習カードを活用することで，学習のめあてを確認でき，学習に参加することができた。また，自己評価をすることで，反省，次時への意欲，めあてへとつなげることができた。そのことが，教師側の評価ともなり，授業改善へのポイントともなった。

〔ふりかえり学習カード〕



〔授業の様子〕

①自分の好きな歌詞を選んで歌っている。

②「せりふ」のグループの話し合いの様子

③楽器のグループの発表の様子

XI　研究の成果と今後の課題

1　研究の成果

(1)　「個に応じた指導」を探るなかで，個性教育についての理論ができた。

(2)　個性教育，基礎・基本の徹底，自己教育力の関連がわかった。そのなかで，教育の大切さ，深さを改めて知ることができた。

(3)　個に応じた授業をすることで，子どもたちが自ら生き生きと活動する姿から，これまでの画一的な授業の弱さを見つけることができた。

(4)　子ども一人一人が選択した学習には，「自分たちがつくり上げよう」とする意欲が見られる。

(5)　これまでの画一的，教師指導の授業改善を求めて研究し，検証授業をして来たが，授業を終えて子どもたちは次のように評価をしている。

○一学期の音楽の勉強と，教え方がちがっていた。楽しかった。
○工夫した勉強がおもしろかった。
○今までより楽しかった。
○歌を歌ったり，踊ったり，楽器を演奏したりしたのが，おもしろかった。
○グループで勉強したのが楽しかった。

2　今後の課題

(1)　理論研究を中心に研究をしてきた。この成果を学校現場で，授業実践に移すことができるかどうかが，今一番の課題となる。

(2)　音楽科の歌唱指導を通して「個に応じた指導」を試みたが，音楽科にととまらず，他の教科でもやっていきたい。

(3)　子どもたちの「豊かな心」を目指すには，私自身が常に課題をもち，実践教育に努めていきたい。

(4)　子どもの思いや，願いがキャッチできる教師でありたい。

(5)　「いつでも」「どこでも」できる，評価カードの工夫をしたい。

3　終わりに

「個に応じた指導」という言葉を耳にしてから，解ったようで，解らない，もんもんとしていた気持ちが，この研修で少し解りかけてきました。また，これまでの自分自身の実践を省みるよい機会となりました。今度の研修で学んだことを，教壇実践に生かして，これからも，研鑽を重ねていきたい。

研修期間中，所長・玉那覇真盛先生をはじめ，きめ細かな御指導御助言を下さった中頭教育事務所の上間順一先生，当研究所の宮城清信先生，運営委員の先生方，たいへんお世話になりました。厚くお礼申しあげます。また宜野湾小学校の校長先生はじめ諸先生の暖かい声かけは大きな支えになりました。感謝申しあげます。

＜引用文献・参考文献＞

文部省	「新しい学力観に立つ音楽科の学習指導の創造」	教育芸術社	平成5年
研究集録	「個を生かす教育指導の在り方」	教育センター	平成5年
金井達蔵・渋谷憲一編集	「個性を生かす指導と評価」	図書文化	1988年
全国教育研究所連盟	「個を生かす教育の実践（上）」	ぎょうせい	平成4年
水越敏行 編著	「個別化・個性化教育の新動向」	図書文化	1988年
北尾倫彦 編著	「よさを発見する指導と評価」	ぎょうせい	平成6年
文部省	「小学校指導書・教育課程一般編」	ぎょうせい	平成元年